去りゆく元兵士たち

元日本軍兵士たちの記録

熊谷仲一郎　著

外文出版社
FOREIGN LANGUAGES PRESS

去りゆく元兵士たち

元日本軍兵士たちの記録

熊谷伸一郎 著

外文出版社
FOREIGN LANGUAGES PRESS

图书在版编目（CIP）数据

远去的老兵：侵华日军老兵口述实录：日文/
(日) 熊谷伸一郎著. — 北京：外文出版社, 2014
ISBN 978-7-119-09270-6
Ⅰ. ①远… Ⅱ. ①熊… Ⅲ. ①侵华事件－史料－
日本－日文 Ⅳ. ①K265.606

中国版本图书馆CIP数据核字(2014)第287133号

责任编辑：郭雅坤
封面设计：白雅丽
印刷监制：冯　浩

远去的老兵

——侵华日军老兵口述实录

熊谷伸一郎　著

©2014外文出版社有限责任公司

出版发行：外文出版社有限责任公司
地　　址：中国北京百万庄大街24号　**邮政编码**：100037
网　　址：http://www.flp.com.cn　**电子邮箱**：flp@cipg.org.cn
电　　话：008610-68320579（总编室）
008610-68327750（版权部）
008610-68995852（发行部）
制　　版：北京维诺传媒文化有限公司
印　　刷：北京蓝空印刷厂
经　　销：新华书店/外文书店
开　　本：787mm × 1092mm　1/16
印　　张：20.25　**字　　数**：240千字
版　　次：2014年第1版第1次印刷
（日）
ISBN 978-7-119-09270-6
08800（平）

版权所有　侵权必究　如有印装问题本社负责调换（电话：68995960）

まえがき

2001年夏、広島県のある地方都市で、私は一人の元日本軍兵士と向き合っていた。

老人から渡された文書を見ると、それはこの地域の住民自治会に関する書類だった。

私は顔をあげ、私の前に座っている81歳の元兵士の顔を見る。文書は、かつて中国で彼が日本軍兵士として行なった加害行為の数々を書いたものだと告げられ、渡されたものだった。

「中国では本当に悪いことをしたけえ……」

その元兵士は、広島弁で何度もそう繰り返した。

しかし、古ぼけた茶色の書類箱から私に渡される書類のどれもが、およそ戦争とは関係のない種類のものだった。

続けるべき質問の言葉を失って、再びその元兵士、元大日本帝国陸軍伍長の顔を見る。

沈痛だが、穏やかな表情。肘掛け椅子に座り、こぶしを膝におき、背筋を伸ばしている。

数年前に脳梗塞を患って倒れ、重い認知症が進むなか、自宅で静かな療養生活を送るその老人に、もはや戦場体験をつぶさに語る力は残されていなかった。

「中国では人には言えないことをたくさんしてしまった」

繰り返されるその言葉を聞きながら、その元兵士の脳裏に去来している光景はどのようなものなのだろうかと考えつづけた。

京都に住む85歳の元日本陸軍大尉は、電話での私の取材申し込みをいったん断った。

数年前、請われて戦場での加害体験を語ったところ、その翌日から不眠・頭痛・嘔吐などの症状に襲われた。数カ月の入院を強いられ、一時は死線をさまよったという。

もう昔のことは思い出したくない——電話からは、取材を断る、流暢な京都弁が聞こえてくる。だが、後日、その元兵士は取材に応じてくれた。戦場での加害行為など、本人の話したくないことについては触れないという約束で、戦争体験の話を聞かせてもらう。

京都での生い立ち、少年時代の話までは順調だった。しかし、青春の多感な時代、洗礼を受けてキリスト教徒となったことを微笑をもって語った直後、老人はふいに表情を曇らせた。

「それなのに、あんな罪を犯してしまって……」

それだけ小声で言うと、老人はうつむき、沈黙した。

聞き取りは、そこで打ち切らざるをえなかった。

新潟県に住む元陸軍兵士の取材の時は、その方の住む古い民家に泊めてもらった。

夕食をいただいたあと、戦争の体験を聴く。

その元兵士が語り始めて数時間が過ぎた。彼は、もう2時間も前から、半世紀以上も前に彼が隊長として行った中国での集落掃討の模様を語ろうとしていた。

話は何度も前後し、脇にずれた。語ることを逡巡しているのだろう、しばしば長い沈黙が話のあいだに入った。

1944年の10月末のことだ。中国の華北地域で分遣隊長をしていた彼のもとに、八路軍が来たとの情報が地元の村長から寄せられた。彼は部下を指揮し、村長を先頭に立たせて出発した。しかし、どこにも八路軍の姿はない。

「内心ではホッとしていたんです。しかし、その村長には、どうしてす

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

ぐに知らせなかったのかと怒鳴りました」

彼は兵に命じてその集落の住民を集め、住民の前で村長を殴った。住民たちの悲鳴が聞こえた。彼は住民たちに池のなかに入るように命じ、さらに村長への拷問を続けた。村長は血だらけの顔を両手でおおい、背中を丸めてうずくまった。

証言は、そこまで来ると、繰り返しそこで止まった。すでに夜も遅い。証言者は高齢だ。聞き取りを中止しようと思った。しかし、口をはさむことのできる雰囲気ではなかった。

夜中の零時を過ぎ、日付が変わった。それまでうつむきながら語っていた証言者が顔をあげた。

それまでの、人の良い、はにかんだような表情が消え、ぞっとするような暗い目をしている。

「……村長を刺殺しました」

彼はそう言うと、すぐに目を伏せてつぶやいた。

「今でも夢に見ます」

アジア太平洋戦争の終戦からすでに70年近い時が流れている。日本敗戦時に20歳だった人も、すでに90近い。戦争指導者はもとより、末端の将兵にいたるまで、多くの人々がすでに姿を消した。世代としての彼らはすでに晩年を迎え、元軍人の団体もほぼすべて解散している。いま紹介した3人の元兵士たちも、すべて鬼籍に入った。

だが、私は記憶している。加害者として存在した過去の自分に苛まれつづけた元兵士たちの表情や、加害の過去への反省を踏まえて、平和運動に後半生を捧げた元兵士たちのこと。

もちろん、自分たちが青春を捧げた戦争は「聖戦」だったと考える元兵士たちも多い。

さまざまな戦後があったことだろう。

多くの加害者たち、そしてもちろんのこと被害者たちにとっても、戦後が戦後でありつづけているにもかかわらず、1956年の経済白書は「もはや戦後ではない」と謳いあげ、戦争の記憶との断絶を宣言した。そのときから、この社会は、考えなければならないこと、胸に刻まなければならないことを置き忘れてきてしまったのではないだろうか。

本書は、2002年から3年間にわたって、日本で発行されている中国情報専門紙『中国巨龍』に連載された「去り行く元兵士たち」を単行本としてまとめたものである。掲載当時からすでに10年以上の時間が経過しており、内容を更新させなければいけないところだが、取材した関係者の多くが亡くなっている。単行本としてまとめることには躊躇する思いもあったが、現在ほど、「加害者として存在することの痛み」が想い起こされるべき時はないように思い、刊行することとした。文中の年齢などはすべて取材当時のものであることをお断りしておく。

当時、仕事のあいまを見つけて、日本軍の元兵士の取材に駆けまわる日々を過ごした。日帰りのことも多かったが、ときにその旅は半月に及んだこともある。北海道から九州まで、百数十人の元兵士たちの体験を聞いた。取材の持続可能性を維持するために、自家用車で寝泊りし、食器を持ち歩いて自炊した。元憲兵に会いにいった冬の山形県では車が雪に埋もれてしまったこともあった。

彼らの戦場での体験は、過去のものでありながら、過去のものとはなっていない。戦争の記憶の風化とともに新たな「戦前」が近づいているかのように思われる今、祖父の世代が体験した戦争のリアリティを知る意味は、むしろ増しているのではないだろうか。

2014年5月3日　憲法記念日に

熊谷伸一郎

目　次

まえがき

第１章　戦場の記憶

「幽霊」と戦後を過ごした元七三一部隊員　*3*
瀬戸内海の島で抱え続けた加害の記憶　*8*
下士官の見た中国戦線　*13*

第２章　戦犯たちの後半生

加害証言　*28*
謝罪碑　*31*
解散　*34*
受け継ぐ会　*37*
「よく頑張った！」　*40*
追悼の言葉　*43*
継承宣言　*46*

第3章　記憶が消えていく

元軍人は何人いるか　*51*
日中友好元軍人の会　*54*
二人の陸軍中将の戦後　*57*
大学「不名誉」教授　*60*

軍国少年　*63*
元軍人の「怨念」　*67*
憲法調査会での「遺言」　*69*
教育の恐ろしさ　*72*

第4章　人から兵士へ、兵士から人へ

漁師町・浦安　*77*
向島での丁稚奉公　*82*
兵士となって中国へ　*89*
初年兵教育　*95*
刺突訓練　*102*
戦場　*107*
井戸に身を投げた少年　*115*
強姦　*120*
強制連行　*122*
戦後　*126*

第5章　加害の記憶

白狼の爪痕　*135*
南京から始まった罪　*138*
大きすぎる罪　*141*
菊池義邦の戦争　*146*
陸軍に入隊　*149*
初討伐作戦　*152*
住民殺害　*154*

第三次魯東作戦　157
家族へ語ったこと　160
1週間分の兵隊　162
靖国にだまされた　164
「二度と同じ道は歩まない」　168

第6章　1000回の証言

戦争を語り続けて　176
多感な青春時代　178
獄中で聞いた父の言葉　181
小樽の紙芝居　184
2・26事件　187
ファシズム期の朝日新聞　190
召集令状——言えなかった言葉　193
別れのボレロ　196
出征の光景　199
中国戦線へ　202
作戦に出ると人が変わる　205
空っぽの遺骨　208
慰安所　211
戦場の岩波文庫　214
慰問袋　217
刺突された捕虜　220
誰の命令だったのか　223
極寒の北千島で迎えた敗戦　226

第7章　実事求是

刺突訓練　236
シベリアから撫順へ　239
学習が人間をつくる　243
出世を目指しての学習　246
入隊によって勉強を中断　249
シベリアでの学習　255
撫順への移送　259
学習活動の萌芽——呼蘭監獄　261
戦犯管理所での学習　264
撫順大学　268

第8章　後半生は平和のために戦った

少年志願兵から「不戦兵士」へ　279
加害を語り続けて　282
元職業軍人たちの平和運動　285
後継者をつくっていく　288
語り遺したい思い　290
中国との交流　293
歴史認識を獲得する　295
時代に流されない理性を　299

あとがき　301

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

第1章
戦場の記憶

「幽霊」と戦後を過ごした元七三一部隊員

松花江は中国黒龍江省ハルピンの人々にとって馴染みの深い川である。中国で五番目の長さを誇るこの大河の名は、日中戦争期間中、「懐かしの我が故郷は松花江のほとり」(我的家在東北松花江上)という歌とともに中国全土で歌われた。

敗戦から50年後、1995年の夏。松花江のほとりで手をあわせる日本人の老人の姿があった。

鈴木進は1920年、千葉県の、かつて村長も出したことのある地主の家に生まれた。

鈴木の父親には、日本陸軍で軍医を勤めている幼馴染がいた。父親は彼に勉強を教えたこともあるという。地域でも秀才として知られていたその幼馴染の名は、石井四郎といった。石井は千葉中学を出た後、京都帝国大学で細菌学などを修め、日本軍に入る。言わずと知れた、関東軍防疫給水部、七三一部隊の生みの親である。

八人兄弟の次男として生まれた鈴木は、商売で身を立てたいと考え、高等小学校を卒業した後、親戚の経営する商店に勤めた。18歳のとき、自ら志願

して関東軍防疫給水部の軍属となる。秘匿名を関東軍第七三一部隊というその部隊が何を目的とする部隊なのか、鈴木はまったく知らなかった。一旗あげようと考えていたわけでもなく、愛国心に燃えていたわけでもない。軍属のほうが給料は高いし、どうせ軍隊には入らなければならないのだから、という漠然とした気持ちだったという。

入隊試験を受けるために東京・戸山にあった陸軍軍医学校へ行ったとき、石井四郎と父親が談笑していたことを鈴木は覚えている。

石井四郎は、細菌兵器の開発と実戦使用を主な任務とする七三一の部隊長だった。試験は筆記試験と身体検査。筆記試験の結果については「想像に任せましょう」と言って鈴木は笑った。身体検査についてまったく問題なかったであろうことは、鈴木の恰幅のいい背格好を見れば容易に想像できる。

鈴木たち20人ほどの入隊者は、東京駅から山口県の下関、朝鮮の釜山を経て、中国ハルピン市にほど近い平房へと連れられていった。1938年の春のことである。平房にはその頃、ロシア風の暖炉であるペチカのついた官舎が幾つかあるだけだった。後にそこは、テニスコートや官舎、毒ガス実験室や死体焼却場など、約16万平方メートルという広大な敷地に数十の建物が林立する場所となる。

その建造物の一つ、「丸太」と呼ばれる人々を収容する監獄を作ることが鈴木たちの主な仕事だった。「丸太」とは、人体実験などに用いられる人々を指した七三一部隊の隠語である。中国人やロシア人、朝鮮人など、少なくとも3000人の人々が、実験資材としての「丸太」とされ、殺された。

当時としては珍しく車を運転することのできた鈴木は、フォード社製のトラックを用い、収容施設建設のための資材購入と搬入を担当した。

自分たちが何を作っているのか知らされたことはない。しかし、日本人以外の者を寄せつけない工事現場で、厚いコンクリートの壁に鉄の扉、そして格子戸をつける作業を通じて、そこが監獄のようなものとして用いられるのであろう

ことは分かった。

鈴木の弟も七三一部隊に入隊した。弟は「丸太」の生体解剖に従事させられていたという。「ご飯も食べられない」と嘆いていた弟はしかし、七三一部隊で取り扱っていたチブスに自らも感染して命を落としてしまう。あっけない死だったということ以上に、その弟もまた何らかの実験「材料」として扱われた形跡があることに、鈴木は愕然とした。

チブスには鈴木も感染した。危篤という電報が実家に届いたが、体力があったのか、命は取りとめた。

そのような職場を辞めたいと考えることはなかったのだろうか。そう問うと、「そうだねえ。辞めても軍隊に取られるだけだし……」と鈴木は複雑な表情を見せた。

「丸太」とされた人々が収容された7棟・8棟は立ち入り禁止とされていたが、鈴木は何度かその内部を見たことがある。細菌感染が恐ろしかったので、あまり深くは入らなかった。7棟・8棟の建設に加わった人々は、機密保護のためでもあっただろうが、そのまま監視人として雇われていたので、彼らと顔見知りの鈴木は立ち入ることができたのだ。

「かわいそうだったねえ。人間として扱ってないんだもんよ」

七三一部隊で行なわれる人体実験のために集められ、「丸太」と呼ばれた中国人、ロシア人たちを目にし、そして彼ら・彼女らの肉体と生命を使っての実験の数々を同僚から聞くたびに、鈴木は「かわいそうだ」と思ったという。

「差別意識？ ない、ない、ない。同じ人間だもん」

しかし、同情する気持ちがあっても、権限を持たない鈴木には何もできなかった。

日本の勝利を信じていた鈴木だったが、戦争が進むにつれ資材などは乏しくなっていき、敗戦を予感するようになる。その予感が現実のものになり、鈴木が敗戦を実感したのは、七三一部隊が撤収の準備をはじめてからだった。

敗戦の直前、7棟・8棟から多くの死骸が運び出されるのを鈴木は目撃している。しばらくして、中庭から煙が大量にあがった。

「やりやがったな、って」

「丸太」とされた人々が毒ガスによって殺害され、焼かれている煙だった。細菌戦は当時の国際人道法においても禁じられていた。それ以前に、人体実験という非人道的行為は、絶対に外部に漏れてはならない事柄であった。万一の時に収容されている人々を殺害できるよう、7棟・8棟には毒ガスのボンベが設置されていた、と鈴木は言う。ちょうど今のプロパンガスのボンベと同じような形をしていた。そのボンベが用いられたのかどうかは、直接自分が操作したわけではないので分からないが、とにかく毒ガスによる殺害だったことは間違いない、と鈴木は言う。

鈴木は、自分が所属していた七三一部隊総務部の部長から、「丸太」とされた人々の骨と灰を松花江に運んで処分してくるように命じられた。遺灰をつめたカマスを兵隊たちがトラックに積んだ。七三一部隊のあった平房から松花江まで、砂利道を1時間半ほどトラックを走らせた。

「幽霊」が出たのは日本への1945年の帰国後、まもなくのことだ。

鈴木が農作業をしているとき、家で眠っているとき、食事をしているとき、「幽霊」は出た。

「幽霊」は、部屋の隅にじっと座り、鈴木を見ている。

「やっぱり、『丸太』の苦しんでいるのを見たからでないかい。悪いこともしていないのに、無抵抗なのに、生きている人を殺したんだから。……悲惨だよ」

七三一部隊での体験を語ることは厳しく禁じられていた。1992年まで、鈴木は誰にも何も語らなかった。はやく忘れたい。そう考えていた。

1995年、鈴木は人に誘われて、やはり七三一部隊で事務員を勤めていた

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com